

ひとつぶの麦 第12号



私たちの村・中川村高齢者福祉計画について
第8期介護保険事業計画(令和3年～5年)既にご覧になりましたか？

— その2 —

社会福祉法人 麦の家 理事長 松本栄二

特 報

ひとつぶの麦第11号で第8期介護保険事業計画が発表された事をお知らせしたところ、早速宮本悟朗(仮名)さんから電話で「インターネットで読もうとしたんだが見つからなかったよ。出来たら麦の家で、『事業計画書』を一緒に読む会の様な機会か、或ば話を聴く場を作って下さいよ」と持ち掛けられました。

妙案だと思います。長野県”認知症の人とその家族を支える会”の代表を永く勤められた関 靖先生を囲んで介護保険制度について、特に中川村第8期介護保険事業計画の内容を中心に話を伺い、一緒に学ぶ計画を立てました。茶菓を頂き乍ら10数人の小人数で楽しくお話を聞く会です。

場 所……麦の家の地域交流センター

日 時……7月下旬か8月上旬頃(午後か夕方辺りで2時間程度の予定)

(電話88-4069までお申し込み下さい。確定次第日・時を知らせ致します。)

前の11号で、文章の最後に中川村第8期介護保険事業計画に「今後村全体で取り組む必要があると考えられる課題(19頁)」として、1)自立支援の意識統一と地域づくりのための目標の共有と、今一つ2)お互いの役割の理解と連帯・協働の二つを挙げていることを採り上げました。事業計画書をよくよく読んでみると「高齢者の自立支援」を課題にする事については、介護保険制度創設当初からの基本理念でもあったのですね。「自らの意志に基づき、自立した質の高い生活を送ることが出来るように支援すること」だと。その根底に「高齢者の尊厳の保持」を重視した支援だとも述べられているのですね。私は、「依存先が十分に確保され、特定の何かに、また誰かに依存している気がしない状態が自立だ…」と重い障害を持つ大学教員の熊谷晋一郎さんの言葉を思い出しました。



歳を重ね、老いが進み、加えて認知症と言う病気が齎す様々な症状がひどくなり、麦の家で止む無く生活を始める人びとにとって、私達介護保険サービスを提供する者はその隣人となり、本人の意志を尊重する、只その事の為に、自らの介護技術を高め、苦悩する当事者の生活環境を整えると共に、対人援助サービスを深めることで、「ご本人らしい」生活の回復・維持を目指す支援、つまり自立の支援の一端を担っている事を改めて思う次第です。

介護保険事業に於ける自立とは、介護保険サービスは勿論の事、村社会に潜む様々な介護サービスを発掘し、利用しつつ、介護を必要としている人びとの(予備軍をも含め)日常生活に手を差し伸べ、地域社会とのつながりを持つ生活が出来る様に支援することだ。この事をしっかり確認し、介護保険事業に参加する同志を募り、村の計画に参加しようではありませんか。(2021.6.25)





「こうちゃん」の電話の声



麦の家では入居して下さるご家族の大切な方をお迎えするにあたって、もっとも大切にしていることは、入居という別離をきっかけに互いの関係を深め、或いは新しい構築の途が開かれるようにと、入居者・家族・職員がつとめていることです。入居者が自分は「此処に」いていいのだという、メッセージを抱き、安心して、生活を再生して頂く事です。竹子さん（94歳）にとって、「こうちゃん」はひとり息子です。独り暮らし、工事現場で忙しく働いておられ、なかなか麦の家に面会に来るのが難しいのです。そこで、私は電話でこうちゃんと話してみることを竹子さんに提案しました。

「むこうは忙しいのに、やたら声をかけたらいかんと思う。こうちゃんが言ったわけじゃない。人に甘えず、たよらず、私は自分でしっかりやる」と断り続けます。

「おとうま、おかあまは、良い立派な人だった。貧乏で苦勞もしたけど、わたしは5人兄弟の長女で無理をいわんかった・・・」

「竹子さんは優しいお姉さんだったのね。でも、時にはこうちゃんに甘えて、無理を言ってもいいのじゃない？」

「いんや、無理を言わん事は何とも思わんし、当たり前や。こうちゃんはいいい子や、私の背中をみて、自然に無理を言わん子に育ったに・・・」

素晴らしい母と子の絆に、私は尊敬するしかない。竹子さんの家族。「当然のように」無理を言いあわない、思いやりあう、親子の愛情のありかたにコトバがありません。おせっかいな私は「こうちゃんが忙しくてだめならすぐ切るから、電話ちょっとかけてみていい？」と自分の携帯から電話をしていました。「お母さんがここに居られます。少し声を聞かせて下さいますか？」明るい「はい」の声。お母さんは両手で携帯を握りしめ、「元気？」「わたしは大丈夫」「体に気を付けて」「じゃあね」・・・と、何気ない、親しげな、ふたりのやりとりが数分続きました。後日。

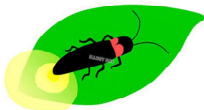
「ねえ、こうちゃんに電話かけるの、いまでも迷惑とと思っている？」

「もう、思っていない。また、声をききたい！！」

「そうね、また、こうちゃんの声聞きましょう」



常務理事 山名敦子



今“この時”を大事にするケア その3 — 自らの死を見つめる —



ある日の午後、昭子さんと和子さんが共同住居のところで、話が盛り上がっていた。昭子「わしが年金をもらい始めてからもう何年も経つから息子も少しは貯めてくれていると思うよ。(笑) 私の葬式のお金くらいは大丈夫だ。」和子「そうだな。もう、大きな葬式はいいから、息子と嫁と孫だけでいいわな。」と、昭子「もうそろそろ・・・。」突然涙を目元に潤ませる。「お迎えがきそうだしな。」「お互い様だよ。」と、二人で大笑いながら、自分の死などの話をする二人の姿。

明さんは、「明日は、妻の一周忌だ。お墓に線香を立てにどうしても行きたい。」妻の死を涙ながら語る。私は、返答に困り、只々、肩をさするだけしかできず、胸が締め付けられる。

麦の家では、入居者と共に積極的に“死”について一緒に話し合う時間を大切にしている。人生の中で、『生きること』『死ぬこと』は切り離せない。年を取り老いる中で、認知症となり、家族と離れ独りで生活される入居者の皆さんは、自らの今までの生き方を見つめ、一人ひとり最後の生き方まで考える姿に、介護に当たる私達も、語る言葉に簡単には答えられない。全力で、誠実に向き合い応えていくことの大切さを日々思う。

ホーム長 田中美保子

